



2006年5月15日 発行

2006年春号

<第8号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 union@n9.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/

「たのしい  
2しゅうかん」

「たんき」ではじめてせんたくをしました。むずかしかったです。シートにふとんをいれました。むずかしかったです。みんなとおはなしをしました。みんなとごはんをたべました。たのしかったです。

グループホームのひとと、ともだちになりました。うれしかったです。かえって、おかあさんにあえてうれしかったです。

「たんき」になれました。「ちゅうき」をはじめました。せんたくと、おふるあらいと、あいろんをがんばりました。かみのけはほつといたらかわきます。でもどらいやーをかきます。ひとりでかいもんにいきました。おかしはこえます。ちよつとずつわけてたべます。

「たんき」はともだちといっしょにしました。「ちゅうき」はひとりでねています。ちよつとさみしいです。1ねんかんががんばりました。まげやんとがんばります。ともだちとなかよくしたいです。ともだちとおはなしするのがだいすきです。(西川 愛美)

### 「短期自立生活体験」は今

「短期自立生活体験」は、月に一度、月曜日から金曜日までの四泊五日、ユニオンのグループホームでの生活体験を行い、生活に必要な家事などの能力を身につけていきます。さらに、期間を約二週間に延ばした「中期自立生活体験」や必要な時に利用できる「レスパイト」があります。

この四月より、一人一泊の利用料(食費)は、「短期」レスパイトは千円、「中期」は八百円になりました。「短期」を利用する人たちは、家庭から離れた生活体験を通して、それぞれのペース、それぞれの形で、自立した生活を模索しています。

短期自立生活体験の利用者数は、中期自立生活体験、レスパイトも含め、年々増加しています。昨年度は、毎週人が入れ替わりながら毎月十五名程度が利用し、利用者数は合計二十五名に上りました。

その背景のひとつには、レスパイトの利用が増えたことがあります。レスパイトとは、家族が旅行や法事などの外出で家を空ける場合に一泊から何泊までも利用できるものです。

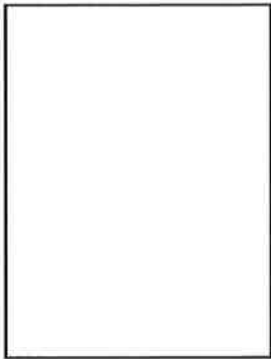
昨年、約二ヶ月間にわたりレスパイトを利用した男

性がいます。彼が一年ぶりに短期自立生活体験を始めたように、母親が足を骨折し入院を余儀なくされました。彼は、四泊五日、「短期」の期間を大きく超え、二ヶ月間という長期間、親と離れた生活を体験せざるを得ませんでした。

突然の出来事に、彼の不安と戸惑いは計り知れないものであったと思います。しかし、彼は、短期自立生活体験での経験を生きかき、さらに自分なりの生活を作り出すことでこれを乗り切ることができました。

親にも子にも、互いに離れて生活することへの不安はあるでしょう。短期自立生活体験で得た親と離れた生活への自信は、その不安を少し軽減させてくれるようです。その証拠に、レスパイトを利用する人の多くは短期自立生活体験を経験しています。

親にも子にも、互いに離れて生活することへの不安はあるでしょう。短期自立生活体験で得た親と離れた生活への自信は、その不安を少し軽減させてくれるようです。その証拠に、レスパイトを利用する人の多くは短期自立生活体験を経験しています。



短期自立生活体験の大きなテーマは、「家庭を離れ、自立した生活を体験してみること」ですが、利用者数の増加に伴い、利用する目的や生活の形も多様化してきました。

現在は、利用料の値下げにも影響され、友人と一緒に過ごす二人部屋から個人の生活が尊重される一人部屋が主流になってきていま

す。また、目的も「将来、東京で一人暮らしをした」「普段会うことの少ない利用者や職員とおしゃべりがしたい」など人それぞれであり、また月日とともに変化しています。そこには、それぞれの自立への想いが垣間見えます。

短期自立生活体験を始めて二年になる彼が、突然「グループホームに入りたい」と言いました。予期せぬ言葉に驚きました。

以前の彼は、プライドが高く、助言をしても「わかっている」と言い返されることも多々ありました。「できないことは許されない」、そんな緊張感が彼にはありました。

しかし、最近自分から進んで話をするようになり、表情も穏やかになってきていました。「家族は自分のことを何もわかってくれない」「自分の力の限界と家族からの期待との狭間で悩んでいる彼にとって、弱い自分も受け入れてもらえる場

ができたことは大きかったように感じます。「グループホームに入りたい」。この言葉は、彼なりにどう家族と距離を取り、良い関係になれるのか考えた末に出た結論であつたのでしょうか。

残念ながら、彼のこの希望はまだ叶っていません。しかし、自立への想いを胸に刻むことができた彼は、自立した生活に向かつて一歩ずつ前進しています。

親と離れた生活は決して楽ではありません。お風呂洗いや洗濯、片付けなど自分のことは、当然自分でやらなくてはなりません。また、家族と離れる寂しさももちろんあるでしょう。

しかし、親と一緒に生活は永遠に続くわけではありません。いずれは、親と離れなくてはならない日が来るでしょう。短期自立生活体験を通して、親と離れた生活もひとつの生活の形としてあることを伝えたいと思います。(中谷)

## 一歩踏み出した挑戦

ワークスユニオンの授産施設を利用されている方の多くは、就職へ向けた訓練を終えてこられています。

しかし、一般企業の就職まで経験されていない方も多く、彼女もその一人でした。

在宅の二十五年間から、授産施設を経て、エルチャレンジを利用した日から、彼女の前向きな新しいチャレンジが始まりました。

夕方になると、ワークスユニオンの食堂でお茶をすすんでいる年配の女性こそ、今回取り上げたい渦中の人、ゆり子さん(仮名)です。

### 「初めての就職」

彼女は、昭和三十二年生まれ、今年で四十九歳になりました。

彼女は、養護学校を卒業後十五歳で、「岩おこし」を作る会社に就職しました。手先が器用な彼女は、仕事はとも順調のようでした。

しかし、誰の支援も受けずに就職した彼女は、自宅から会社までの道を覚えるのに

平成十三年「ワークス匠」の

利用を始めました。

平成十五年、エルチャレン

ジ(大阪府・大阪市などが進める重度雇用促進事業として、公的な建物の清掃の訓練を通じて、清掃会社等への就職を目指す事業)の「市立西

屋内プール」を経て、その後「アピオ大阪」の清掃訓練に挑戦しました。

整然としたホテルの客室に入り込み、ジョブコーチから教えられている事が何なのか、緊張のあまり理解できず、ただ呆然と立ち尽くしている彼女がいました。なかなか挨拶も出来ず、「返事も「うん」と小さな声で言うのが精一杯でした。

私は、そんな彼女の姿を見て、「これ以上の負荷をかけたくない」と思い、頭のどこかに彼女がいつ辞退するのが本人の為になるのか、など考えていました。

しかし、彼女は生き生きと働きました。下を向いて挨拶も出来なかった彼女が、周りの人に自ら挨拶に行けるようになってきました。

平成十三年「ワークス匠」の

### 「就職に向けて」

先日、就職が決まるということで、障害者職業センターにて、面接を受けました。

彼女は生まれて初めてネクタイを締めた四人の男性に囲まれて極度に緊張して固まってしまいました。

挨拶どころか、名前も言えない彼女がとった最後の行動は「ためき寝入り」でした。頭の中がパンクした、というのは、まさしくこのことだと思います。

しかし、一時間経つと突然「わたしのおねえちゃんなあゝ」と家族の話を始めました。経験を積んで変わった彼女の姿を実感しました。

四月に就職が決まり、「なみはやドーム」での清掃をしています。職場の人に慣れるのに時間がかかるのでは、と支援者は不安でした。しかし、初日の彼女の心配は「わたしは弁当どこで食べられるんかなく」でした。

「家からの一歩」  
彼女は、両親が他界した後、

姉夫婦の家で生活をしていました。そんな彼女は、頑なにその家を出るのを嫌いました。「姉夫婦の家から出たくない。このまま、姪や大好きな犬の『ミル』と一緒に暮らしたい。」そんな想いを持つ彼女を姉夫婦が説得し、

「短期自立生活体験」を始めました。

そこでの、仲間との生活体験がすごく楽しかったようです。その後、彼女はあれほど拒否をしていたグループホームに入り、現在は、前述のように味わいのある生活をしていきます。

### 「可能性への挑戦」

そんな彼女の挑戦続きの四年間は、ユニオンを利用している皆さんのいろいろな可能性を明示しているのではないかと感じます。

就職も、自立生活体験も、居宅介護も、授産施設もそして、グループホームも、『ワークスユニオン』のサービ

スを使って、自分の人生の幅を広げるいい材料にして頂ければと思います。(荒木)

# 平成十八年度を 迎えるにあたって

「障害者自立支援法」施行の年となる年度を迎え、改めて新しい制度の理不尽さと、不条理さを感じています。

利用者さんや保護者の皆さんの肩に、重くのしかかる一割の負担。確実に削減される施設の運営費、それに反比例するかのようが増大する、事務書類・・・

「このまま進むと、日本の障害者福祉はどうなってしまうのか？」「今まで培ってきた福祉の質は維持できるのか？」「国の財政状況が逼迫していることは百も承知しているが、あまりにもひどい、声弱き者・社会的弱者への面当て。」との、不安と憤りをどうすることもできません。

ユニオンの本年度については、五カ所の小規模通所授産施設は、枠組みを変え

て、「就労支援事業(非雇用型)」として障害者自立支援法の「訓練等給付」に該当する施設としての運営を検討しております。

また、グループホームは今の形態を踏襲する形での「ケアホーム(介護等給付による共同生活援助)への移行を考えております。

激動の本年度を乗り切るために、主任三人体制を敷き、より組織的な運営ができる体制を整えました。

うれしい悲鳴 「就労支援はしない。」と明言するユニオンで、エルチャレンジを通じて二年間で六名の就職、そして本年度も内定者を含めて三名の就職が確定しています。それぞれの人が、自分の力を発揮できるよう支援を続けます。

ただ、このペースで就職が増え続けると、「ユニオンは、定員割れ?」・・・この点については、早急に手を打っていかねばなりません。(南石)

## 職員紹介

### 山川 宗計

四十数年前、学生運動のさなか、革命を夢見てこの世界に飛び込みました。そして、そこで目にしたのは、開設間もない婦人保護施設で暮らす、悲惨な女性たちの姿でした。その後、地域福祉に没頭し、日本各地で施設長を務めます。

五年前、施設では出来なかつたことを、と当法人の立ち上げに踏み切りました。人生に思い悩んだ時には、ベートーベンの深い旋律にどっぷりと浸かり、身をゆだねるのだと話します。利用者や職員の気持ち

をこつそりと解する鋭い洞察力は、「福祉」という言葉には、はまりきらない、「人間」への興味からくるのでしようか。生涯現役を志し、「俺は舞台の上で死にたい」と、役者のような台詞でニヤリと笑います。

### 三宅ふさ野

子ども時代からずっとバレーボールに打ち込み、今ではPTAのチーム監督を務めます。お琴に民謡、太極拳、やりたいことを一杯やるのが三宅流。

「様々な人の教えが、今の自分に活かしている。」と、これまでを振り返ります。そして、「人との出会いを大切にね。」と、私たちにも気さくに話をしてくれます。

グループホームの世話人として、母として、ユニオンにただならぬ想いを注いできました。決して前へ出ず、小さな体で腰をかがめて掃除をする彼女は、ユニオンにとつてとても大きな存在です。(内田・宮崎)

## 編集後記

▼時の首長は社会に格差があるのは良いことだと豪語し、人間生来の競争心をかき立てます。それを是正するのが為政者の務めであるはずなのに、彼らは「官」の無策を正さず、その始末を「民」に押し付けようとする。そして、その煽りを受けるのは、勝負に伍してゆけない、力の弱い人たちです。▼「障害者自立支援」の美名の下に提示された新法は、弱者も自分の生活は自分で責任を取れという、自立を丸投げした体の良い切捨てでしょう。▼その渦中で、この号に紹介されためぐみさんやゆり子さんは、自立とはほど遠くても、たどたどしい歩みを重ねながら、しかし確実に自分なりの暮らしを作り上げています。▼この時にあって、私どもは、決して為政者たちに追従せず、狭められた貧しい施策の中で、絶えずこの人たちの側に立ち、その精一杯の自立を支え続けたいと、強く思うのです。(山川)